

# “I” と “You” が、なぜ言えないのか？ — 日英語の根源的異なりの一考察 —

植野 貴志子<sup>1</sup> 井出 祥子<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東京都市大学共通教育部 〒158-8586 東京都世田谷区等々力 8-9-18

<sup>2</sup> 日本女子大学文学部 〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

E-mail: <sup>1</sup> uenokishiko@gmail.com, <sup>2</sup> side@lares.dti.ne.jp

あらまし 一人称代名詞“I”と二人称代名詞“you”は、中学 1 年生用英語教科書の冒頭で導入される基本の「き」であるが、日本人の英語学習者にとって必ずしも容易いものではない。本研究では、“I”と“you”をめぐる問題を取り上げ、日本語と比較しながら、その言語的特徴を考察し、英語教育における“I”と“you”の導入に係る問題点を論じる。まず、“I”と“you”とは、自分と相手の相互関係システム I-You を形づける「空の記号」であるとともに、文構成上、主語として義務的な要素であるが、それに相当する語は日本語には存在しないことを指摘する。次に、“I”と“you”が中学 1 年生英語教科書でどのように導入されているかを調べ、問題点を挙げる。最後に、これらの議論に基づき、英語教育において、日本語と英語の根源的異なりを分かりやすく提示することの重要性を指摘する。

キーワード I, You, わたし, あなた, 日英語比較

## The Difficulty of Saying “I” and “You” for Japanese — A Study of Fundamental Differences of English and Japanese —

Kishiko UENO<sup>1</sup> and Sachiko IDE<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Foreign Language Center, Tokyo City University 8-9-18 Todoroki, Setagaya-ku, Tokyo, 158-8586 Japan

<sup>2</sup> Faculty of Humanities, Japan Women’s University 2-8-1 Mejirodai, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8681 Japan

E-mail: <sup>1</sup> uenokishiko@gmail.com, <sup>2</sup> side@lares.dti.ne.jp

**Abstract** The first-person pronoun “I” and the second-person pronoun “you” are part of basic grammar that is introduced in English textbooks at the beginning of junior high school. However, these are not always easy for Japanese learners of English to understand. In this study, we discuss the problem of “I” and “you.” First, we argue the “I-You” relationship formed by “I” and “you” holds no relevance in the Japanese language because corresponding words to “I” and “you” do not exist. These signs are essentially “empty” of meaning, though they are compulsory elements in English sentence structure. Next, we investigate how “I” and “you” are introduced in first-grade English textbooks and point out some problems. Finally, based on these discussions, we showcase the importance of clearly showing the fundamental differences between the two languages in English education.

**Keywords** I, you, *watashi*, *anata*, comparative perspectives of English and Japanese

### 1. はじめに：“I”と“you”は難しい

ここ十数年来、文科省主導による『英語が使える日本人』の育成、「国際共通語としての英語力向上」を目標とした英語教育改革が行われてきた。背景には、中高大を通して英語を学んでも英語が使えるようにならないという実情があり、「コミュニケーション・ツールとしての英語」の習得が喫緊の課題とされてきたのである。これに対する方策として、筆者が携わる大学

英語教育においては、グローバル・スタンダードの外部検定試験や CEFR 基準に基づいたカリキュラムの導入が進められてきた。しかし、こうした動きが加速する一方で日々痛感するのは、初歩的な段階でつまづき、日本語と英語の異なりを明確に理解しないままに、英語に対してもやもやとした疑問を抱え、苦手意識を増大させている大学生が少なからずいるということである。本稿では、英語教育の初歩的な項目の一つである

植野貴志子・井出祥子，“I”と“You”が、なぜ言えないのか？—日英語の根源的異なりの一考察—，  
言語学習と教育言語学 2019 年度版, pp. 1-7,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編集，早稲田大学情報教育研究所発行，2020 年 3 月 31 日。

Copyright © 2019-2020 by Ueno, K., & Ide, S. All rights reserved.

“I”と“you”を取り上げ、日本語との比較の観点からその言語的特徴を考察し、英語教育における“I”と“you”の導入に係る問題点を論じる。

中学英語でアルファベットの次に学習するのは、“I”と“you”である。“I”は「わたし」に当たる一人称代名詞、“you”は「あなた」に当たる二人称代名詞として、疑問を差し挟む余地がないほど当たり前提示される基本の「き」である。しかし、“I”と“you”は日本人の英語学習者にとって必ずしも容易いものではない。

筆者は、英語を習い始めて間もない中学1年生から「“I”, “you”, “he/she/it”というのが分からない。あれは何なのか」と聞かれたことがある。それに対して「“I”と言う人が“I”となり、“I”が話しかける相手が“you”になる。“I”が一人称代名詞、“you”が二人称代名詞であり、三人称代名詞“he/she/it”は、“I”が“you”以外の人やものを指して言うときに使う」と伝えたところ、「日本語で話すとき、そんなふうに見たことはない」と返ってきた。ここには、自分と他者を言語においてどう捉えるかが、日本語と英語で必ずしも同じではないことが率直に指摘されている。

上の中学1年生が発した“I”, “you”に関わる疑問は、はっきりと自覚しないまでも、初学者が往々にして抱くものであろう。そうした疑問は、解決されないまま高校、大学へと持ち越されることも多いのではないだろうか。実際、大学の英語教育現場においても、“I”, “you”をめぐる様々な問題が見受けられる。例えば、英語が苦手な大学生の一人から、「“You”は『あなた』であるが、日本語で『あなた』などと相手に言わない。英語では相手に対して“you”と言ってもよいのか」という質問を受けたことがある。さらに、習熟度の低い授業において、“Do you...?”の問いかけに対して、咄嗟に“I”と言えず、問いかけの“you”につられるように、“you”と返す学生がいることがある。

上のような“I”と“you”の使用に関わる問題は、英語では“I”, “you”を主語に据えて文を構成するが、日本語はそうではない(岡 2013; 三上 1960; 金谷 2002)という日英語の文法の異なりを十分に理解していないこと、英語運用能力が低く“I”と“you”を交替させながら話すことに慣れていないこと等、習熟度の低さゆえに生じる、取るに足らない稀なケースとして片付けられがちである。しかし、“I”, “you”の使用に関する問題は、赤木(2004)にも示唆されるように、習熟度が低い学習者だけに起きるわけではない。

理工系研究者である赤木(2004)は、自身の英語論文口頭発表での経験に基づき、「日本人研究者が日頃気付かない、あるいは間違えやすい」留意点として、「日本人は“I”を使いにくい、英語の論文発表と割り切って“I”を使えばよい」、「出席者を指すとき、日本人の感

覚では“we”のほうが丁寧のように思われるが、“you”を使用するほうがよい」と述べている。赤木の指摘は、英語で論文発表するほどの英語力を備えた日本人の中にも、自覚があるにしろないにしろ、「自分を“I”と言い、相手を“you”と言うことへの抵抗」を抱いている人がいることを示している。

筆者が中学生や大学生から受けた“I”と“you”に関わる疑問や赤木(2004)が挙げる“I”, “you”を言うことへの抵抗の背後には、何があるのだろうか。これは、英語教育に携わる者にとっては、看過できない問題ではないだろうか。しかしながら、現在の英語教育は、こうした問題を正面から扱っておらず、管見の限り、この点を明確に議論した研究は見当たらない。

言語学者・哲学者の井筒俊彦(1991)が「人はことばの奴隷である」と言ったように、母語における語の単位は、そのまま認識の単位となって人のものの見方を規定し、人はその制約から逃れることはできない。知らず知らずに、人は生まれついた母語の網目を通して世界を分節して見ているのである。

日本語母語話者が英語を学ぶということは、日本語の語の単位、認識の単位を通して世界を見ている者が、英語の語の単位、認識の単位を通して世界を見ることを新たに知ることである。これは、日本語と英語の根源的異なりを知るという試みでもある。“I”と“you”という語の単位は、どのような認識の単位、もの見方をもたらしめているのだろうか。そして、“I”と“you”は、日本語の相当表現とどのように異なるのだろうか。日本語と英語の根源的異なりを橋渡しすることは、英語教育の大きな課題であり、これを避けて英語力の向上は立ち行かないであろう。

本研究では、第一に、英語の“I”と“you”によって形づけられる I—You の関係は、日本語では成立しないことを議論する(2節, 3節)。次に、“I”と“you”が中学1年生英語教科書でどのように導入されているかを調べ、問題点を指摘する(4節)。最後に、英語教育への示唆を述べる(5節)。

## 2. “I” と “You” とは？

英語を含む印欧諸語の一人称代名詞は“egō”(自我)を共通の起源とし、二人称代名詞は共通して“tu”に近い語に遡る。一人称代名詞、および、二人称代名詞は、その起源から一貫して、話者自身、および、話者が対峙する相手を指し示す語であり続けてきた(鈴木 1973; 三輪 2000)。

英語の一人称代名詞“I”と二人称代名詞“you”は、言語体系や話者の言語活動においてどのような意味をもつか。印欧語のもの見方を探求した言語学者 Benveniste (1971: 217-222) は次のように述べてい

る。

- (A) “I”と“you”は、いかなる概念にもまた特定の個人にも関わることがないという点において、「空の記号」(“empty” signs) (Benveniste 1971: 219) である。
- (B) “I”と“you”は、他の直示表現を含む全ての語と区別される特異性をもち、言語のうちにあって、みずからを除く他の全ての記号の境域を超えたところに位置を占めている。
- (C) 相互的な関係のシステムを形づくる I—You は、言語使用の基盤である。

(A) において、“I”と“you”がいかなる概念にも、個人にも関わることがないというのは、どういうことか。例えば、名詞「花」を取り上げてみれば、「花」という一つの概念があって、「花」と発せられる個々の用例は「花」という概念に帰ることができる。それに対して、“I”と“you”は、話者によってなされる個々の発話においてのみ、話者自身とその相手が同定されるのであり、それら個々の用例を包括する概念は存在しない。すなわち、“I”と“you”は意味的実体をもたず、特定の概念にも、個人にも、関わることがない「空の記号」である。

この「空の記号」という性質は、“I”と“you”だけでなく、“he/she”, “this”等々、直示表現一般に通じるものである。例えば、“he”は「空の記号」であることにより、“he”を含む個々の発話においてのみ、“he”が指し示す個人が同定される。しかし、以下に述べるように、“I”と“you”は、他の直示表現と一線を画している。

(B) において、“I”と“you”は、他の直示表現を含む全ての語と区別される特異性をもちつということ、次のように説明される。まず、“I”には、“I”と言う話者自身による当の発話の内に現存するという必然がある。つまり、“I”は、“I”の外に存在する“object” (対象) を指すものではない。“I”は、あくまでも“I”が“I”と言うその発話の内にある。これは、他の直示表現を含む全ての語と区別される“I”の特徴である。そして、この特徴こそ、話者が“I”と言うことによって自分自身を“subject” (主語) の位置に置き、ことばを使用する“subject” (主体) となることを可能にする<sup>1</sup>。つまり、“I”は、記号の体系としてのことばを具体的な発話へと変換する鍵である (Benveniste 1971: 220)。

さらに、話者が“I”と言うには、“you”と呼ぶ相手との対称がなくてはならない。つまり、“I”と言うこと

の中に、“you”がすでに設定されている。このことから、“I”と“you”は、他の全ての語と区別される特異性をもち、言語のうちにあって、みずからを除く他の全ての記号の境域を超えたところに位置を占めると言えるのである (Benveniste 1971: 218)。

以上のことから、(C) にあるように、“I”と“you”によって形づくられる相互的な関係のシステム I—You は、言語使用の基盤となる。この I—You の相互的な関係のシステムは、例えば (1) のように、会話者が“I”と“you”を交替することによって構成される対話を基礎づけるものである。

(1)

A : Do you like sports?

B : Yes, I do. I play tennis every weekend.

How about you?

A : I sometimes play baseball with my friends.

(1) のごく短いやりとりにも示されるように、英語の対話は、主語の位置に表示される“I”と“you”が入れ替わること、すなわち、I—You の相互的な関係のシステムに則り、“I”によって“you”と定義された者が、次に“I”となり替わるという連続で成り立っている。

「語の単位は、そのまま認識の単位となって人のものの見方を規定する」という井筒 (1991) の指摘に基づけば、他の直示表現を含む全ての語と区別される特異性をもち、言語使用の基盤として、I—You の相互的な関係のシステムを形づくる“I”, “you”という語の単位は、認識の単位となって、英語話者のものの見方を強く規定していると考えられる。

認識の単位である“I”と“you”は、主語の位置に置かれ、文構成上、義務的である。主語の表示が義務的であるのは、一人称“I”, 二人称“you”だけでなく、三人称“he/she/it”にも共通する英語の文法規則である。しかし、この文法規則は、「一人称、二人称に合わせて、三人称が形成されたという印欧語の極端で例外的な性質」(Benveniste 1971: 195-204) によるものと考えれば、これも“I”と“you”という認識の単位の産物であると推測することができる。

日本人の英語学習者に、“I”と“you”の使用に関する難しさや抵抗が感じられるのは、“I”, “you”の本質が日本語母語話者にとって容易に理解されるものではないにもかかわらず、そのことが英語教育において把握されていないためではないだろうか。

日本語には、“I”と“you”に相当するものはあるのだろうか。このことを次節で論じる。

<sup>1</sup> 文法用語の「主語」も、哲学用語の「主体」も、原文のフランス語では *subject* の一語、英語訳でも *subject* の一語である。

### 3. 日本語には“I”と“You”に相当するものはない

日本語では、いわゆる一人称代名詞として「わたし」、「わたくし」、「ぼく」、「おれ」等々、多数の語を挙げることができる。いわゆる二人称代名詞としては、「あなた」、「おまえ」、「きみ」等々、多数の語がある。しかし、それらのほとんどは、「空の記号」である“I”、“you”とは異なり、それ自体に何らかの意味を含んでいる。

「わたくし」は「公に対して自分一身に関する事柄」、「ぼく」は「しもべ」を語源とする（『広辞苑』第7版、2018年）。「あなた」は、「彼方」が転じて相手を敬って指す語になったとされる。「おまえ」は、もともとは「貴人の前」を、「きみ」は「君主」を意味する（『広辞苑』第7版、2018年）。このように、日本語のいわゆる一人称、二人称代名詞は、もともと、社会的上下関係に基づいた位置や役割を意味していた。現代日本語では、語源の持つ意味がそのまま維持されてはいないが、各々の語はそれぞれに特有の社会指標性を有している。例えば、「わたくし」は改まった丁寧さを、「おれ」は男らしさ、荒々しさを指標するというように。したがって、これらは、“I”、“you”のような「空の記号」ではない。

それでは、日本語の自分および相手を指し示す語とは、どのような特徴をもつのだろうか。この問題を論じるにあたり、「自称詞」、「対称詞」（鈴木 1973）という用語を使用する。鈴木（1973）は、日本語の自分および相手を指す語を説明するために、話者が自分自身に言及する語、および、話者が相手に言及する語を総称する用語として自称詞、対称詞を導入した。上に挙げた、いわゆる一人称代名詞、二人称代名詞は、全て自称詞、対称詞に含まれる。自称詞、対称詞の用語が必要なのは、自分および相手を指すとき、いわゆる一人称、二人称代名詞以外に、親族名称や役割を表す語が多分に使われるからである。

自称詞、対称詞の使用は、だれであっても、どんな状況でも自分と相手を指して使われる“I”と“you”とは異なり、自分と相手との現実的、具体的な関係や場面に大きく依存する。図1は、40代の小学校男性教師をモデルとして主要な場面での自称詞、対称詞のパリエーションを示している（鈴木 1973）。

図1のモデルの男性が使用する自称詞は、家庭において自分の父親に面すれば「ぼく」、妻に面すれば「おれ」、息子に面すれば「お父さん」となり、職場において上司である校長と向きあえば「私」、生徒と向き合えば「先生」となる。対称詞については、自分より目上に対しては、その人の役職か親族名称を用い（「校長先生」、「お父さん」）、同等、目下に対して

は、名前、または「あなた」、「きみ」、「おまえ」等のいわゆる二人称代名詞を使う。

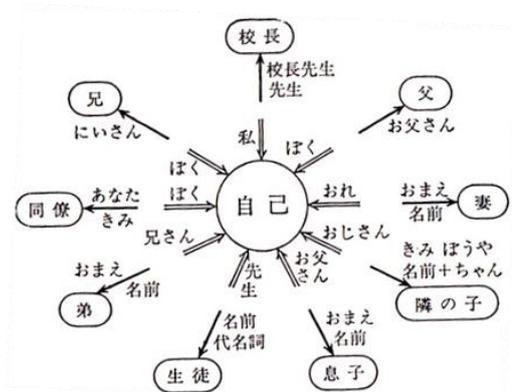


図1. 40歳男性小学校教師による自称詞、対称詞の使用（鈴木 1973：148）

上の観察から、いわゆる二人称代名詞の使用は対同等、対目下に限ることが示されるが（鈴木 1973）、米澤（2016）は、それらの中でもっとも一般的とされる「あなた」について、その使用が実際には極めて限定的であることを明らかにしている。

米澤（2016）は、10～60代の日本人428名を対象とした「あなた」の使用に関するアンケート調査を行い、「『あなた』を全く用いない」と答えた被験者の割合は、対目上では約90%、対同等では約63%、対目下では約68%にのぼったと報告している。「あなた」を使うのは、喧嘩腰のときや叱るとき等、特殊な状況である。通常、「あなた」で相手を指すこと自体が無礼な響きをもち、忌避される傾向がある。

以上のように、日本語で自分および相手を指すときに用いられるのは、“I”と“you”のような「空の記号」ではない。日本語の自称詞、対称詞は、それ自体が役割や関係を意味し、それらの使用には、場における上下関係を基軸とした、非相互的で、具体的な人間関係や場面の関与がある。

次に、“I”と“you”が文構成上、義務的であるのに対して、日本語の自称詞、対称詞は文構成上、義務的ではない。まずは、英語の自己紹介の例を見てみよう。

- (2)
  - I'm Kate Wood. I'm new here.
  - I come from Canada.
  - I speak English and French.
- (文部省検定英語教科書『Sunshine 1』p31)

(2)の全ての文は、“I”を主語とし、それに動詞が伴っている。文は“I”と動詞によって成り立ち、“I”も

動詞も文構成上、不可欠である。日本語では、同様の状況で、(3) のような言い方が自然ではないだろうか。

(3)  
はじめまして、  
山田と申します。  
東京出身です。  
日本語と英語が話せます。

自己紹介の場で、初対面の人を前に立ったとき、「山田と申します。東京出身です。」と言えば、十分である。「わたしは」などと言わなくても、話しているその人が、自分のことを述べていることは、場の状況から明らかである(岡 2013)。もしその場に自己紹介をする人が複数いれば、他の人と区別して、あえて自分を取り上げて強調し、「わたしは、山田です」、あるいは、別の人と同様であることを強調して、「わたしも、東京出身です」と、「わたし」を付けて言うこともあるだろう。しかし、ここには、英語の“I”(主語)のような文構成上の義務はない。「わたし」は、文構成上、不可欠なものでなく、場の状況に応じて使うこともあるが、話者が誰であるかは場の状況から明白であるので、使わないのが無標である。

対称詞についても文構成上の義務はない。(3) は、初対面の女性二者による会話の一部である(「ミスター・オー・コーパス」より)(cf. 井出・藤井編 2014)。

(3)  
162 L 食べられますか、食は  
163 R 私、は食が、細いし  
164 R 遅い、食べるのがまた遅いから、みんなに迷惑かけるんだけども  
.....  
174 L え、量が少ないんですか、いつも食べられるときは  
175 R あ、でも、そんな少ないわけじゃないんだけども  
.....  
181 L 痩せてらっしゃいますよね、て、{笑い}実はどうなん{笑い}  
182 R それ、運動してるから、ちゃんと  
183 L ああ、え、何やられてるんですか  
184 R 水泳と  
185 L ああ  
186 R 早朝のウォーキング

L は R に対して、R に関する 4 つの問いかけ (162, 174, 181, 183) を発しているが、R を直接に指示する対

称詞は一度も使われていない。会話の文脈から、また問いかけという行為自体から、相手への言及であることが明らかである。加えて、ラレル、イラッシュルの尊敬語によっても、相手への言及であることが明確になる。

上に見てきたように、日本語には“I”と“you”に相当する語はない。日本語にあるのは、具体的な役割や人間関係を含意する多様な自称詞、対称詞である。また、それら自称詞、対称詞は、“I”、“you”とは異なり、文構成上、義務的ではない。

したがって、日本語においては、“I”と“you”によって形づけられる相互の関係のシステム I—You という言語使用の基盤が存在しない。よって、I—You の相互の関係のシステムに則って“I”と“you”を交替しながら行う対話は、日本人の英語学習者になじまない。

#### 4. 中学英語教科書における“I”と“you”の導入とその問題点

中学 1 年生用の文部省検定英語教科書の主要 3 種(『Sunshine 1』『New Crown 1』『New Horizon 1』)において、“I”と“you”がどのように導入されているかを調べた。いずれの教科書においても、冒頭で自己紹介場面が設定され、人称変化した be 動詞を伴って“I am ...”, “You are...”が導入されている。例文とその説明は、次のとおりである。

- 『Sunshine 1』 (p. 24)
  - Hi, I am Yuki.
  - Oh, you are Yuki. I'm Mike.「私は～です」は<I am ~.> で、  
「あなたは～です」は<You are ~.>で表します。
- 『New Crown 1』 (pp. 20-22)
  - I am Tanaka Kumi. 「私は～です」
  - You are Ken. 「あなたは～です」
- 『New Horizon 1』 (pp. 23-25)
  - I am Ellen Baker.
  - You are Ando Saki.I は「わたしは」、am は「です」に当たる。  
you は「あなたは」、are は「です」に当たる。

『Sunshine 1』と『New Crown 1』では、“I”、“you”と be 動詞の活用形を組み合わせ提示し、“I am”、“You are”は「私は～です」、「あなたは～です」と説明している。『New Horizon 1』では、“I”、“you”は「わたしは」、「あなたは」であり、“am/are”は「です」と説明している。

“I”, “you”を「わたしは」, 「あなたは」に当てはめたこれらの説明を見れば, 「日本語では相手に『あなた』などと言わないのに, 英語では相手に“you”と言ってもいいののか」(1 節)と疑問をもち, 英語で話すことに心理的抵抗を抱く学習者がいるのも不思議ではない。

3種の教科書の説明は, 初学者に“I”と“you”を教えるための便宜を優先したものとしても, 英語と日本語の違いを無視するどころか, 両言語の本質をゆがめ, 無理やり対応させたものと言わざるを得ない。中学生であれば, 日本語母語話者として, 自称詞, 対称詞の使用に関する感覚や判断を備えている。日本語の感覚を捻じ曲げてでしか理解できないような説明は, 不要な混乱を招き, 英語に対する嫌悪を生むことになりかねない。

英語教育においては, 日本語と英語の異なりを明確に提示し, 両言語の異なりを意識化させ, その上で, “I”と“you”の使用を習慣化させるための訓練までを盛り込んだプログラムをデザインすることが必要であろう。学習者が意識化すべき日本語と英語の異なりを以下に示す。

- (1) “I”と“you”とは, 自分と相手の相互的關係システム I—You を形づける「空の記号」である。それに相当するものは, 日本語にはない。
- (2) 日本語には, 自分と相手を指す多様な語があり, それらは, 自分と相手の関係や状況に応じて使われる。
- (3) “I”と“you”は, 主語の位置に置かれ, 義務的な文構成要素である。
- (4) 日本語では, 自分と相手を指す語は義務的な文構成要素ではない。
- (5) 英語では, I—You の相互的關係システムに基づいて, “I”と“you”を相互に交替しながら対話が行われる。
- (6) 日本語には, I—You の相互的關係システムに相当するものはない。そのため, 英語で対話するとき, 自分を“I”として確立し, 相手“you”と対峙して相互に話す心構えが必要である。

“I”と“you”を導入するにあたり, 上に示した項目を学習者の状況に応じて分かりやすく説明し, 日本語と英語の異なりを踏まえながら学習を進める必要がある。そうすることにより, 学習者は, 母語である日本語を見直す一方で, 学習対象言語である英語に対してどう向き合うかを考えることができるだろう。その上で, “I”と“you”を習慣的に言えるようにするための対話練習等を重ねることが効果的であると思われる。これにより, ひいては「自分を“I”と言い, 相手を“you”と言う

ことへの抵抗」(赤木 2004)が軽減されることにもなるであろう。

## 5. 終わりに：英語教育への示唆

学習者の英語に対する苦手意識の大部分は, 日本語と英語の異なりが理解されていないことに起因するにもかかわらず, 現在の英語教育は「コミュニケーション・ツールとしての英語」の習得を偏重し, 学習者の母語である日本語と学習言語の英語の隔たりをいかに橋渡しするかという問題に向き合うことなく, 見過ごしている。この問題は, 中学から, 高校, 大学に至る全過程で, 検討されるべきである。

グローバル・スタンダードの外部検定試験等による英語力の数値化が重視されつつある大学英语教育において, 多くの学生から, 「英文法を学び直したい」という声を聞く。筆者<sup>1</sup>の大学で, 学生がどんな種類の英語科目を履修したいと考えているか, アンケート調査を行ったところ, 全回答 580 件のうち, 「英文法」は 270 件(約 47%)で最も多く, 「外部検定試験対策」205 件(約 35%), 「英語コミュニケーション」110 件(約 19%)を上回った。英文法に対する確実な理解がなければ, 「コミュニケーション・ツールとしての英語」の習得も, 外部検定試験のスコア向上も望めないことを学生達は切実に感じているのである。

“I”と“you”は, ことさら取り上げられることもないほどに当たり前の語であるが, 本論で示したように, 日本語にはそれと同等の語はない。これは, 日本語と英語の根源的異なりの一部である。話者は“you”と対峙し, 自分を“I”と指すことによってみづからを主語の位置におき, 主体性を得て, 他の全ての言語的記号を行使する(Benveniste 1971)。“I”と“you”は英文法の根本であり, また, 英語使用の基盤である。したがって, “I”と“you”を適切に理解することは英語学習の要である。

人は生まれついた母語の網目を通して世界を切り取って見ており(井筒 1991), 母語によって形づけられた世界の見方は, 話者のアイデンティティを形成している。英語教育において, 日本語と英語の根源的異なりを橋渡しすることは, 必然的に, 英語学習者が母語である日本語を見直し, 日本語母語話者としてのアイデンティティを自覚する機会を与えることになる。日本語母語話者としてのアイデンティティを土台として英語を使えるようになること, これこそが「英語が使える日本人」の目指すべきものであると考える。

本研究は JSPS 科研費基盤研究(C)「日本人の英語発話モデルの構築—話ことばの日英対照研究を基に—」(課題番号 17K02746)の補助を受けている。

## 文 献

- [1] 赤木靖文, “パワーエレクトロニクス研究者・技術者のための英語論文の書き方・発表の仕方,” 電気学会論文誌 D, 124 巻, 8 号, pp.737-742, 2004.
- [2] E. Benveniste, Relationships of person in the verb, in Problems in General Linguistics, pp.195-204, University of Miami Press, 1971. (Émile Benveniste, Problemes de linguistique generale, 1966)
- [3] E. Benveniste, The nature of pronouns, in Problems in General Linguistics, pp.217-222, University of Miami Press, 1971. (Émile Benveniste, Problemes de linguistique generale, 1966)
- [4] 井出祥子・藤井洋子編, 解放的語用論への挑戦, くろしお出版, 東京, 2014.
- [5] 井筒俊彦, 意識と本質, 岩波書店, 東京, 1991.
- [6] 金谷武洋, 日本語に主語はいらない, 講談社, 東京, 2002.
- [7] 三上章, 象は鼻が長い, くろしお出版, 東京, 1960.
- [8] 三輪正, 日本語人称詞の不思議, 法津文化社, 東京, 2010.
- [9] 岡智之, 場所の言語学, ひつじ書房, 東京, 2013.
- [10] 鈴木孝夫, ことばと文化, 岩波書店, 東京, 1973.
- [11] 米澤陽子, “二人称代名詞「あなた」に関する調査報告,” 日本語教育, 163 巻, pp.64-78, 2016.